

# チーム医療に不可欠なコミュニケーション能力と個性をグループ・ディスカッションで評価

## 志望学科横断のグループで協調性などを測る討論試験

学部で生み出された入試だ。

藤田保健衛生大学は、医学部と医療科学部の2学部7学科2専攻によって構成された医療系総合大学だ。「独創「理」という建学の理念には、「一人ひとりの創造力が、新しい時代を切り拓く力となり得る」という想いが示され、先駆的な医療人養成を追求してきた。その象徴の一つが、学部・学科の枠を越えたチーム制での連帯活動を早くから教育カリキュラムに組み込んだ「アセンブリ（全員集合）教育」だ。「アセンブリ教育」は、現代のチーム医療に欠かせない能力を段階的に身に付けるプログラムとなっている（図3）。ここで重要とされるのは、相互に信頼関係を築くためのコミュニケーション能力だ。こうしたアセンブリの理念を、現代の課題に合わせて入試に組み込んで考えられたのが、2016年度からスタートした「アセンブリ入試」だ（図1）。2014年に、星長清隆学長が就任以来、大学改革に着手。組織改革や入試改革が急速に進んだ結果として、医療科

## 評価基準は公表せずに生徒の個性が現れるよう配慮

「アセンブリ入試」は医療科学部のす

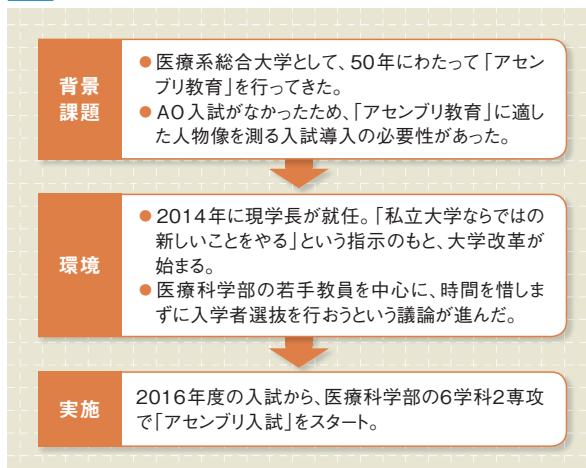
べての6学科2専攻を対象としている（図2）。まず出願の際に高校時代の課外活動などについてまとめた「アクティブレポート」を提出、第1次試験では、「国際適性を測る英語の試験と、科学性を測る理科系の筆記試験で評価する。国際適性については、TOEIC® TESTやTOEFL、英検などで一定の得点や条件を満たしていることが証明できれば、試験は免除される。第1次試験の通過者には、結果通知時に、約2週間後に行われる第2次試験のグループディスカッションのテーマが提示される。テーマは年度によって異なるが、主に、医療を学ぶ意志のある学生としての考えを問う内容だ。グループディスカッションをどのように行うかの設定は、時間を費やして検討した。入試担当教員の間でコミュニケーションとトライアルを何度も繰り返し、不公平なディスカッションにならないように、また、受験生の個性が見える議論になるように、あらゆる設定を想定。企業採用などのグループディスカッションでは、進行自体を受験者に任せるケースもあるが、受験生が平等

に発言できるように、司会は教員が担当。評価は各学科から2名ずつの教員がディスカッションを観察して採点するが、教員たちが観察する位置も、近すぎず遠すぎず、議論が活発になる距離を試しながら決めていったそうだ。「導入にあたっての議論も含め、担当教員の負担は大変なものであったと感じましたが、学部の将来を担う若いスタッフを中心に、皆熱心に取り組んで



医療科学部 副学部長  
濱子二治教授

図1 藤田保健衛生大学の入学者選抜改革のステップ



取材・文／長島佳子



図2 「アセンブリ入試」の概要 (2018年度)

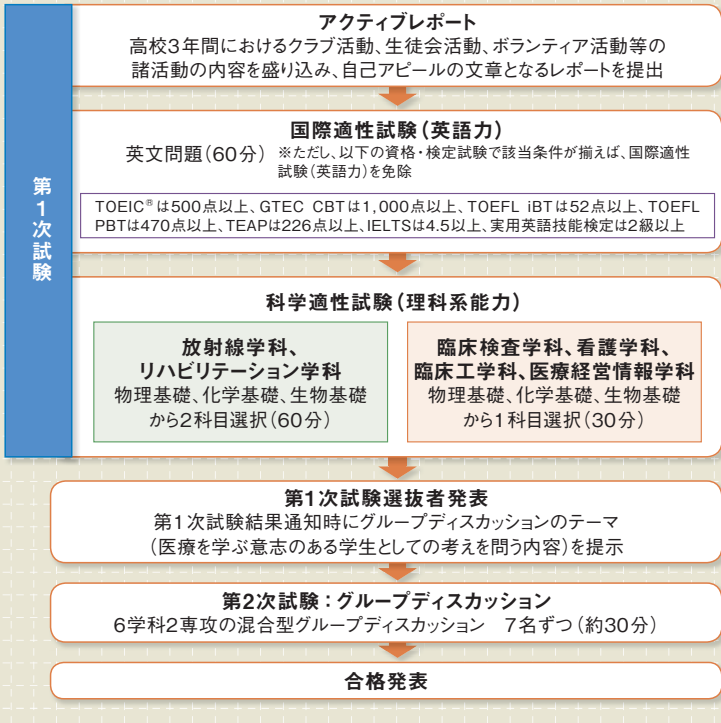
●対象学部

医療科学部(臨床検査学科、看護学科、放射線学科、リハビリテーション学科 [理学療法専攻・作業療法専攻]、臨床工学科、医療経営情報学科)

●求める人材

コミュニケーション力(積極的に他者とも関わり、グループの中で自分の意見を順序立てて述べる事ができ、相手の意見を聞いて主義主張の違いを理解・分析でき、自分の長所や短所を冷静に分析できるなど)、語学力に長けた人材

●入試の流れ



第1次試験

くれました」(濱子副学部長) 評価基準の詳細は公開されていないが、学業成績だけでは測れない個性・協調性・発言力などを総合的に判断。5つの大きな評価項目ごとに、それぞれ3〜6の評価視点がつき、観察者がそれぞれ記入する評価シートに基づいて採点を行う。評価基準を公表しないのは、コミュニケーション能力を判断する試験とはいえ、求める人物像やAP(アドミッションポリシー)・DP(ディプロマポリシー)は学科によって異なるためだ。また、高校が捉える協調性や積極性と、

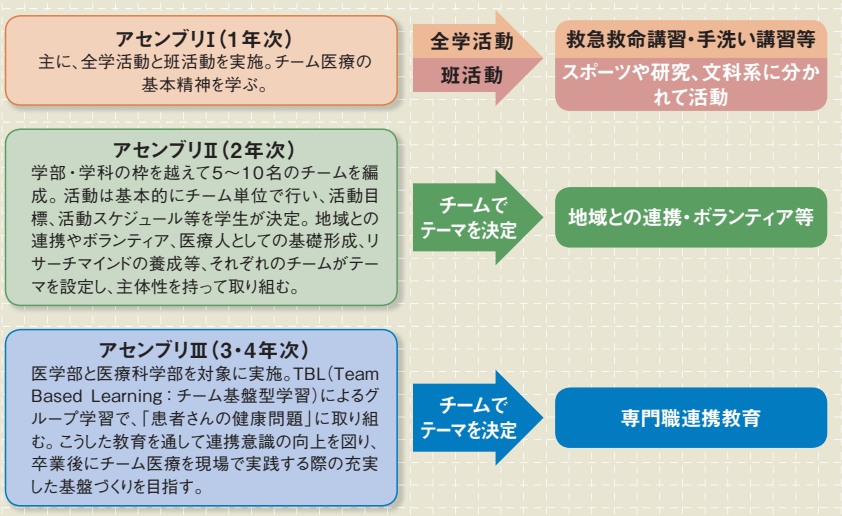
併願可で、広い間口により多くの受験生から適材を選ぶ

結果として、グループディスカッションでは予想以上に議論が活発に行われ、大学の理念に沿った、同期生の模範となるような狙い通りの学生を採用できたという。「アセンブリ入試」の募集枠は15名と、学部の募集枠全体の約3%

だが、志願者数は2016年度では約2倍の33名が、2017年度は2.9倍の44名と増加。2018年度はさらに募集枠を増やすことが決まっている。「他学のAO入試は専願がほとんどのはずですが、併願可能としていることもこの入試の特徴です。他校の一般入試を目指す生徒さんも含め、間口を広げて多くの受験生から本学にあった人材を選んでいきたい。今後はより多くの受験生にチャレンジしてもらいたいです。そのために、「アセンブリ入試」の

入学者たちが、入学後に個性を發揮できるように環境整備にも力を入れていきます」(濱子副学部長) 一例として、同学は50年前からクラス制度を運用してきたが、クラスの中で「アセンブリ入試」枠の学生たちが個性を發揮し、同期生に刺激を与えるよう、担当が果たすべき役割について議論が始まっている。また、入試結果と授業成績、卒業までの学修成果を関連づけた統計を取り、エビデンス化していく取り組みも実施されている。「アセンブリ入試」の学生たちに対する評価は、学力試験の得点だけでは測りきれない。そのため、入試の際の評価基準のようなルーブリック

図3 「アセンブリ教育」について



を作成。学生自身による自己評価と、DPに対しての達成度などを評価する「学修成果可視化システム」を構築し、2017年度から運用している。「可視化システムによる個人の評価は学年末に学生にフィードバックします。学生たちが自分の成長をふり振り返りながら、本学が育成したい人材としてさらに成長する意欲につながればと期待しています」(濱子副学部長)